生老病支
ひょうごの現場から

建築資材アスベスト（石綿）が原因で中皮腫や肺がんなどを発症した患者やその家族らでつくる「中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会　ひょうご支部」（神戸市中央区）の本年度の総会がこのほど、同市内で開かれた。発症までの時間が長く、予後もよくないため、「静かな時限爆弾」と呼ばれるアスベストによる疾患。当日、中皮腫患者２人が披露した闘病体験談を紹介する。（竜門和諒）

約20人が参加した「中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会　ひょうご支部」の総会の様子＝いずれも神戸市兵庫区羽坂通4、同区文化センター（10月7日撮影）

中皮腫患者会で語られた闘病体験

赤黒く染まる胸水、治療は「延命」

「自分が発注した建材が原因とは…」

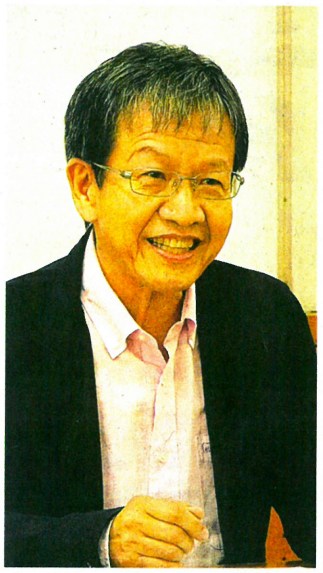
真方（まかた）　明さん（68）＝宝塚市

昨年末、エックス線で肺に白い影が見つかった。たばこも吸わず、がん家系でもなかったため戸惑った。今年1月に悪性胸膜中皮腫と診断され、すでに手術もできない状態。治療方針は延命だと説明された。

免疫治療中の時期は特につらく、胸水がたまって呼吸困難になることも。抜いた胸水は中皮腫の恐ろしさを示すように赤黒く染まっていた。現在は治療で腫瘍がかなり小さくなり、経過観察中だ。

宝塚市の技術職員として定年まで勤めた。思い返すと、約40年前に勤務していた浄水場のポンプ室は、むき出しの石綿が吹き付けられていた。劣化した石綿がはがれてキラキラと舞い、面白がった見学の小学生が壁をこすって遊んでいた。当時は、軽く注意するだけだった。

昨年秋ごろから、運動中に「ゼーゼー」と濁ったような呼吸音になっていた。



診断からの経緯を説明する真方明さん

尾上一郎さん（68）＝西宮市

2017年7月、健康診断で右肺に水がたまっていると指摘され、再検査で悪性胸膜中皮腫と診断された。手術ができず、手を打たなければ余命は6カ月くらいと告げられた。奈落の底に突き落とされたようだった。

大学卒業後、内外装を主に扱う建設会社に就職し、長年施工管理を担当した。取引先だった建材メーカーの「安全」という言葉を信じ、アスベストを含む建材を使い続けていたのだが、「自分が発注していた内装材が…」と言葉が出なかった。

抗がん剤やがん免疫治療薬「オプジーボ」などによる治療が始まった。局所麻酔下で、肝臓に転移した腫瘍を高温の針で焼く治療は、叫び倒し、のたうちまわるような痛さ。この治療で6センチあった腫瘍をほぼ焼き切ることができた。

現在経過は順調だが、治療の副作用などで手足にしびれが残り、生活では不便を感じることも多い。一方で、妻や娘と過ごす時間が増え、「家族でご飯を食べてたわいのない話をすることが何よりの幸せ」と感じるようになった。完治は望めないが、できるだけ毎日を楽しく生きたいと願う。

闘病経験を語る尾上一郎さん

数十年を経て牙をむいた建材を憎む。

発症後に支援者や患者、その家族らから励ましを受けた。今年の夏には、待ち望んでいた孫を抱くこともでき、「もっと生きたい」と気持ちを強く持つことができている。

県内死者、全国3番目に多く

アスベストが原因で発症する中皮腫は完治が難しいとされる。厚生労働省によると2022年に全国で1554人が亡くなり、都道府県別で兵庫県は120人と、大阪府、東京都に次いで3番目に多い。

中皮腫の治療で腫瘍の範囲が限られている場合、肺や胸膜などを切除する外科手術が行われる。しかし手術ができないケースも多く、放射線療法や抗がん剤による化学療法が中心になる。18年には、肺の表面を覆う胸膜にでき、最も患者が多い悪性胸膜中皮腫に対して、がん免疫治療薬「オプジーボ」（一般名・ニボルマブ）が保険適用になり、治療の選択肢が広がった。

一方、患者と家族の会は全国組織で、ひょうご支部は05年、尼崎市のクボタ旧神崎工場周辺で石綿被害が相次いで発覚したクボタショックを機に発足。現在約50人を数える会員らの情報共有に加え、新型コロナウイルス禍以前は年に1度の日帰り旅行なども行い、親睦を深めてきた。補償の拡大や新薬開発のための基礎研究支援などを国に求める活動も継続する。

同支部世話人の山口美佐恵さんは「石綿への暴露や、石綿が原因の症状だと気付かない人も多い。多くの建物に石綿が残ったままで今後も被害が続く。補償拡大と新たな治療法の確立について、諦めず求めていく」と話している。

アスベスト（石綿）太さが毛髪の約5千分の1の繊維からなる天然鉱物。安価で耐火性に優れており、建材などとして広く使われた。粉じんを吸い込むと十数年から50年程度の潜伏期間を経て肺がんや中皮腫などを発症する可能性がある。2006年に使用や製造、輸入が禁止されているが、現存する建築物には多く残っており、解体に伴う飛散が懸念される。05年、尼崎市のクボタ旧神崎工場の従業員や周辺住民に健康被害が出ていたことが判明、石綿健康被害救済法の施行につながった。

「生老病支　ひょうごの現場から」は第4月曜掲載。「生」「老」「病」を巡る医療の話題や、前を向いて「支」え合う人たちの取り組みなどを紹介します。

神戸新聞報道部医療・科学チーム　FAX 078.360.0629　iryou@kobe-np.co.jp